

- (11) 大系本校異による (諸本略号も同書)。
- (12) 以下、蜻蛉日記の異文は上村悦子氏『蜻蛉日記校本・書入・諸本の研究』(古典文庫・昭38) による (諸本略号も同書)。
- (13) 「述語内」とは、複合動詞から成る述部を分離させてその間に係助詞が介在するもの、述部内に係助詞が介在してその下を「あり」「す」などが補助するものをいう (中村幸弘氏「係結の構文論的取り扱い」『文教大学国文』10号、昭56・3。『補助用言に関する研究』右文書院・平7、所収)
- (14) 以下、源氏物語の異文は『源氏物語大成校異備』による (諸本略号も同書)。
- (15) この例はI型でもある。
- (16) 以下、枕草子の異文は『校本枕草子』による (諸本略号も同書)。
- (17) 小田勝「源氏物語における無助詞の名詞」『聖徳学園岐阜教育大 学紀要』33、平9
- (18) その点、新編日本古典文学全集が「程になしてこそ」の下を読点に改め、また新日本古典文学大系も同様に読点としているのはいかがであろうか。なお「程になしてこそ」が「命侍らば」に係る (接続助詞「ば」内で流れる) と考えるのは、意志性の「なして」と無意志性の「命侍る」の続き方が落ち着かないし、順接仮定条件句内で係結の結びが流れた例を中古和文中に得ない (小田勝、注7文献) ので、採れない。
- (19) 「はら、くかと申(武藤本)、はへると申(古本)、はらくかと申(大秀本、竹物語)、はらくる (吉田本)、と申(正保刊本)、はらくかと申(武田本)、はらくかと申(内閣文庫本)」「(上坂信男編『九本対照竹取翁物語語彙索引本文篇』笠間書院・昭55による)
- (20) そのほか、文末で結びの語が省略された「〜にや。」の「〜」部分に係結が現れた例が2例みられる。いずれも「こそ」で、すなわち「〜こそ〜にや。」の句型である。
- ・おのおのの御行末をゆかしく思ひ聞えけるこそ、斯くはかな

かりける身を惜しむ心のまじりけるにや。(源氏・御法・④三  
○四―12) 会八別本の「阿」本以外異文なし▽  
・このわりに、おぼえなくて折々ほのめく筆のこのねこそ、  
心得たるにやと聞く折侍れど、：(源氏・橋姫・⑤三七―7)  
会八異文なし▽  
この句型は、2例とも異文がない (全くないか一本を除いてない) ので本文の確実性は高いが、調査資料中、源氏物語にわずかに2例みられるだけである。また「〜ぞ〜にや」―なむ―にや」の句型はみられないようである。

Ⅱ「二重の係り」は極めて例が少ないが、それでも異文のない例、または一本を除いて異文がないという例も存する。

Ⅲ「二重の係り」の起こる句型には次の三タイプがある。

①「第一係り」が接続句で、「第二係り」が必須の格成分以外のもの

②「第二係り」が述語内のもの

③「第二係り」がト格のもの

特に、「第一係り」「第二係り」の両方が必須の格成分であるという例はみられない。

Ⅳ「—ぞ—ぞ—連体形」「—なむ—なむ—連体形」「—こそ—こそ—已然形」のように、同じ係助詞による「二重の係り」しかみられない。

注

(1) 係結の誤用とされる例について正面から取り上げたものに、伊牟田経久氏「係り結びについての一考察—誤用とされる例をめぐって—」(『国文摩路』41号、平9)がある。

(2) 松尾捨治郎氏『国語法論攷 追補版』(白帝社・昭45)九八頁、松尾聡氏『古文解釈のための国文法入門』(研究社・昭48)二二八頁。

(3) 使用テキストは次の通りである。

竹取物語(『竹取物語総索引』武蔵野書院・昭33)

伊勢物語(大系本。『伊勢物語総索引』明治書院・昭47による)

土佐日記(『土佐日記本文及び索引』白帝社・昭50)

大和物語(大系本。『大和物語語彙索引』笠間書院・昭45による)

蜻蛉日記(講談社学術文庫。通読による)

落窪物語(大系本。『落窪物語総索引』明治書院・昭42による)

枕草子(『枕草子総索引』右文書院・昭42)

源氏物語(『対校源氏物語新釈』平凡社・昭27)

紫式部日記(新大系。『紫式部日記語彙用例総索引』勉誠社・平9による)

和泉式部日記(『和泉式部日記総索引』武蔵野書院・昭34)

以下、所在は頁数、行数。引用に当って一部表記を改めた所がある。

(4) 小田勝「係助詞に対する過剰な結びについて」『國學院雑誌』平10・1月号。なおこの構文については伊牟田経久氏注1文献にも取り上げられている。

(5) 「係助詞が文中にあつて活用語がこれを受けるとき、その活用語が活用形を変える現象をいう。」(『ベネッセ古語辞典』事項編「係り結び」の項)など参照。

(6) 終助詞か間投助詞かの議論は今ほ措く。

(7) Bについては、小田勝「係結の流れをめぐって—源氏物語を資料として—」(『聖徳学園岐阜教育大学紀要』35、平10)、同「係結の流れをめぐって」(『国語学会平成10年度春季大会口頭発表表』)がある。

(8) 「なぞ」「ぞは」「ぞや」「こそは」は用例採集の対象外とした。

(9) 注釈書の整定本文をテキストにしているため、校訂が加えられている可能性もあることに注意。なお、「は」「も」との「二重の係り」は、勿論、

・吹きくる風は花の香ぞする(古今集・一〇三三)

・龍田川にぞぬさは手向くる(同・三〇〇)

のように相当数の用例がごく普通にみられる。

(10) 以下、「地」は用例が地の文にあることを、「会」は会話文中にあることを示す。

してこそ—なりて(別本ノ宮国)、ナシ(別本ノ陽) V  
しかし、18は、

18 B なるほどそれをもつともなくらゐ、顔かたちはい  
かにも調つた奇麗さで、修行やつれしたりいたします  
のも、かはいさうなほどでございました。(今泉忠義

氏訳、桜楓社版⑩一九五頁)

のように、「げにぞ」は「けうらにて」に係る(そこで所  
謂「結びの流れ」を起こしている)と考えられる(新全集  
訳も同様)。19も同様に、「ながむるほどになむ」は「過ぎ  
つつ」に係っていると考えられよう(「つつ」で結びが流れ  
るのは稀だが、皆無ではない)。

問題は20で、「すこし似つかはしかりぬべき程になして  
こそ」と「聊か思ひしづまらむ折になむ」とが「語り聞え  
まほしき」に係るとすると、異なる係助詞による「二重の  
係り」の唯一例となる。しかし、この例、20のような句読  
では文勢がやや落ちつかないように思われる。この右近の  
詞は、時方の、「かく(右近ヲ連レテ来イト)「匂宮ガ」宣  
はせて、「御迎エノ」御使になむ参り来つる。」に対する詞  
で、右近は、

20 B 参上してもしつかりお話し申しあげることが出来

そうな気がいたしません。浮舟の忌が果てて、ちよつ

とよそに出かけると人に言うのも少し似つかわしい時

分に(敢えて)しましてから…

と答えているのである。日本古典文学全集本が「程になし  
てこそ。」と句点を付し、日本古典文学大系も、

20 C 似つかはしかりぬべき程になしてこそ「参らめ」。  
のようにしているが、それに従うべきであろう。異なる係  
助詞で「二重の係り」を起こしているかに疑われる例は、  
せいぜい右の程度なので、前節三の「ぞ」なむ「こそ」の  
二重の係りは同じ係助詞間でのみ起こる」は認めてよいよ  
うに思われる。

「ぞ」なむ「こそ」と「や」「か」との「二重の係り」は  
竹取物語の本文存疑箇所<sup>1)</sup>に例みられるだけである。

21 但、子うむときなん、いかでかいだすらん、はらく  
かと申(竹取二八ウ)△吉田本のみ「なん」ナシV

この箇所は古来本文難解とされる箇所<sup>2)</sup>で、「子うむときな  
ん、いかでかいだすらん」の部分には吉田本以外異文はな  
いが、「はらくかと申」の部分は相当な異文がある。<sup>19)</sup> 新編  
日本古典文学全集は、

21 B ただし、子をうむ時なむ、いかでかいだすらむ、  
侍んなると申す。

のように校訂しているが、そうだとすれば「いかでかいだ  
すらむ」の部分は挿入句ということになる。いずれにして  
も21には何らかの誤写がある<sup>20)</sup>。

#### 四 結 論

以上、本稿で得た結論は次の通りである。

I 係助詞の付いた文節が一文中に二つ(以上)あって、そ  
れらが同一の用言に係っているとき、その係結関係を「二  
重の係り」と呼ぶ。

17 D その残りの品々を、…お弟子等六十余人のごく気心のわかつた者だけがお仕へ申しあげてをりましたが、そのお弟子等の身の程に応じ分け前をして、…(今泉忠義氏訳、桜楓社版⑥七九頁。「お弟子」ノ前ノ「…」ハ今泉氏訳文ノママ)

のように、「御弟子ども六十余人なむ、親しきかぎりさぶらひける」を挿入句とみるべきであろう。

以上、「ぞ」「なむ」「こそ」による「二重の係り」の全例から、次の諸点が指摘される。

一、「二重の係り」は極めて例が少ないが、それでも異文のない例、または一本を除いて異文がないという例も存する(用例4、8、9)。

二、「二重の係り」の起こる句型には三タイプがある。

①「第一係り」が接続句で、「第二係り」が必須の格成分以外のもの

②「第二係り」が述語内のもの

③「第二係り」がト格のもの

特に、「第一係り」「第二係り」の両方が必須の格成分であるという例はみられない。

三、「第一係り」と「第二係り」とは、

「—ぞ—ぞ—連体形」 4例(用例3、4、9、

10)

「—なむ—なむ—連体形」 9例(用例2、5、6、

8、12、16)

「—こそ—こそ—已然形」 2例(用例7、11)

のようであつて、同じ係助詞による「二重の係り」しかみられない。

三については、一見、異なる係助詞による「二重の係り」と疑われる例も存しないわけではない。そのことについて節を改めて考えたい。

### 三 異なる係助詞による「二重の係り」

異なる係助詞による「二重の係り」と疑われる例は、私見では次の3例をあげることができる。

18 げにぞ、「浮舟ハ」かたちはいとうるはしくけうらにて、行ひやつれむもいとほしげになむ侍りし。(源氏・手習・⑥二九一—3) 会八別本の「阿」本以外異文なし。「阿」ハ「なむ」ナシ▽

19 ながむるほどになむ、はかなくて過ぎつつ、日数ぞつもりにける。(蜻蛉日記・中二三三) 消息ハ「菰」本以外異文なし。「菰」ハ「ぞ」ナシ▽

20 「右近詞」今更に、人も怪しいと思はむもつつましく、参りても、はかばかしく聞召しあきらむばかり物聞えさすべき心地もし侍らず。この(「浮舟ノ」御忌果てて、あからさまに物になど人にいひなさむも、すこし似つかはしかりぬべき程になしてこそ、心よりほかの命侍らば、聊か思ひしづまらむ折になむ、仰言なくとも参りて、げにいと夢のやうなりし事どもも、「句宮二」語り聞えまほしき」といひて、…(源氏・蜻蛉・⑥一八五—10) 会八折になむ—ナシ(横池)な

こそおほえしか。(枕草子・一七七―13) 地へ能因本  
「とこそおほえしか」ノ「こそ」ナシ

テキストが独自異文(またはそれに準ずるもの)となつて  
いる5例も、そのうちの3例は右の三タイプに分類され  
るものである。

12 心憂き命の程にて、斯くさまざまの事を見給へ過ぐ  
し、思ひ給へ知り侍るなむ、いと恥かしう心憂くなむ  
侍る。(源氏・宿木・⑤二九四―12) 会へ別本の「保  
・桃」本を除き全て「心憂くなむ」の「なむ」ナシ

13 世の常のさまには思し憚る事もありけむを、斯かる  
さまになり給ひにたるなむ、心安く聞えつべくなむ侍  
る。…(源氏・⑥手習・二九六―8) 会へ湖月抄独自  
本文、全本「聞えつべくなむ」の「なむ」ナシ

14 おとど(源氏)も宰相の君(夕霧)も、只この  
事一つをなむ飽かぬ事かなとなむおほしける。(源氏  
・藤裏葉・③二六二―6) 地へ湖月抄独自本文、全本  
「事かなとなむ」の「なむ」ナシ

12、13はⅡ型、14はⅢ型である。右の三タイプに分類され  
ない例は、テキストが独自異文(またはそれに準ずるもの)  
となっている次の2例だけである。

15 心おのづから驕りぬれば、思ひしづむべきくさはひ  
なき時、女の事にてなむ、かしこき人、昔も乱るるた  
めしなむありける。…(源氏・梅枝・③二四〇―11)  
会へ湖月抄独自本文、全本「ためしなむ」の「なむ」  
ナシ

16 この木のもとになむ、「狐ガ」時々あやしきわざな  
むし侍る。(源氏・手習・⑥三三五―3) 会へ湖月抄、  
大島本の二本を除き全て「わざなむ」の「なむ」ナシ  
異文のない例で、右の三タイプのいずれにも分類されな  
い「二重の係り」と疑われる例に次のようなものがある(1  
例)。

17 「僧詞」…。「入道ハ」さらぬ物どもも、多くは奉  
り給ひて(ソノ他ノ品物モ大部分ハ寄進ナサイマシ  
テ)、その残りをなむ、御弟子ども六十余人なむ、親し  
きかぎりさぶらひける、程につけて皆処分し給ひて、  
なほし残りをなむ京の御料とて送り奉り給へる。…  
(源氏・若葉上・③三六二―8) 会へ異文なし

この例は、「親しきかぎりさぶらひける」を「御弟子ども  
六十余人」に対する説明の挿入句とみ、

17B その残りヲ 御弟子ども六十余人ニ 程につけて  
皆処分し給ふ

と考えると、「なむ」の付いた二つの補充成分が、同一の  
用言「処分し給ひて」に係ることになるが、「第一係り」「第  
二係り」とも必須の格成分である点で、極めて異例(唯一  
例)である(15、16も「第一係り」は任意の格成分であつ  
た)。二格の格助詞の非表示は皆無ではないが極めて少ない  
ことも勘案して、

17C その残りを、弟子たち六十人余りの親しい者だけ  
がお仕えしてりましたが、応分にその人たちにみな  
お分けになりました、…(新全集訳、第四冊一七頁)

少なさは「二重の係り」がまさに破格であることを示しているのであるが、それでも異文のない例も存するし、「二重の係り」の起こる句型は限られていて、全く乱雑に存在するわけではない。「二重の係り」の起こる句型は次の三類に整理される。

I 「第一係り」が接続句で、「第二係り」が必須の格成分以外のもの。

2 「…歌…」とてなむ、「ゆめこのゆき落とすな」と

使ひにいひてなん、「宮二」たてまつりたりける。(大和物語・三〇四―一) 地入とてなむ―ナシ(巫鈴)<sup>11</sup> V

3 幼き人も「兼家ノ」御供にとて「御嶽詣二」ものすれば、とかく出だしたててぞ、その日の暮にぞ、われも、もとの所(＝旧邸)など修理しはてつれば、渡る。(蜻蛉日記・中五五) 地入「出だしたててぞ」ノ「ぞ」ナシ(彰無)、渡る―わたり(上急彰無)<sup>12</sup> V

4 「道綱方」…「…」など言ふにぞ、いとぞいみじき。(蜻蛉日記・中二二九) 地入「東」本以外異文なし。「東」ハ「いとぞ」ノ「ぞ」ナシ。「吉」ハ「いとぞいとぞ」V

5 ここちのいと苦しうても、こと久しければなむ、一餌袋といひたりしもの(＝歌)を、わびて(＝苦心シテ)、かくなむものしたりし。(蜻蛉日記・下一六三) 会入なむ一餌袋といひたりしものをわびて―ナシ(学静東吉) V

II 「第二係り」が述語内<sup>13</sup>のもの。

6 「それなむ見苦しき事になむ侍る。いかで御覽ぜさ

せむ」と聞え給ふとや。(源氏・野分・③二二―三) 会入「事になむ」ノ「なむ」ナシ(三、河内本、別本)<sup>14</sup> V

7 「尼詞」いでや、さればこそさままためしなき宿世にこそ侍れ」とて喜ぶ。(源氏・若菜上・③三六―一五) 会入さればこそ―されば(陽池国)。にこそ侍れとて―には侍なれと(別本ノ阿) V

8 中宮(＝秋好)の御母御息所なむ、さま殊に心深く、なまめかしためしにはまづ思ひ出でらるれど、人見えにくく、苦しかりしさまになむありし。(源氏・若菜下・④五二―二) 地入「榊」本以外異文なし。(榊ハ「御息所なむ」ノ「なむ」ナシ) V

III 「第二係り」がト格のもの。

9 「兼家ノ様子ヲ見ニ行ツタ道綱ノ報告」…「にはかにいと苦しかりしかばなむ、えものせず(＝作者ノ許ニ訪レズ)なりにし」となむ「兼家ハ」のたまひつる」と言ふしもぞ、「ソナナ弁解ナラ」聞かぞおいらかにあるべかりける」とぞおほえたる。(蜻蛉日記・中二六一) 地入異文なし V

10 片つ方は下ながら、すこし簾のもと近うより給へるぞ、「まことに絵にかき、物語のめでたきことに言ひたる、これにこそは」とぞ見えたる。(枕草子・七八―14) 地入能因本「とぞ見えたる」ノ「ぞ」ナシ<sup>16</sup> V

11 「帝ハ」宮の御方にわたらせ給ひて、「私(＝清少納言)ニ「…」と仰せられしこそ、「ソナナコトヲ帝ニ申シ上ゲルトハ、宣方ハ」物狂ほしかりける君」と

ので、本稿では、まず、仮に、係結を最も狭く、

「係結」とは、係助詞が文中にあって文末の活用語がこれを受けるとき、その活用語が活用形を変える現象をいう。<sup>(5)</sup>

のように定義し、右の定義に違反するものを、当面、「係結の違例」とする。中古和文中の「係結の違例」は、次の六タイプに整理されることになる。

A 過剰な結び（係助詞の付いた文節が意味上文末に係らないにもかかわらず、文末がその係助詞に対する曲調終止をしているもの）用例1参照。

B 流れ（係助詞の付いた文節が、そこで切れない文節（文中の用言）に係るもの）

例「別納のかたにぞ、曹司などして人住むべかめれど、こなた（西ノ対）は離れたり。」（源氏・夕顔・①一三二―八）

C 係助詞の付いた文節が体言と呼応しているもの

例「これなむ都鳥」といふをききて」（伊勢物語・一一七―12）

D 係結の文末に終助詞<sup>(6)</sup>が付いているもの

例「かう「人ノ容姿ヲ」いひひて、心ばせぞかたうはべるかし。」（紫式部日記・三〇三―3）

E 不整合（「ぞ」「なむ」の結びが文末にあって、連体形以外の活用形になっているもの。「こそ」の結びが文末にあって、已然形以外の活用形になっているもの）

例「われはと思ひあがる中将の君ぞ、」…」など聞

ゆ。」（源氏・初音・③二―4）

F 二重の係り（係助詞の付いた文節が一文中に二つ（以上）あって、それらが同一の用言に係っているもの）

例「…」と言ふしもぞ」「…」とぞおぼえたる」（蜻蛉日記、異文なし、用例9参照）

Aが係結として必ずしも違例ではないこと前稿で述べた通りであり、これによってすでに前の「係結の当面の定義」も変更される必要が生じている。B以下についても同様に詳細な検討が加えられることによって、係結の把握がより精緻になることが期待されるが、B、Eについては別稿に譲り、本稿では以下、Fのタイプについてみることにしたい。資料は中古の代表的な和文資料10作品（注3参照）により、係助詞は「ぞ」「なむ」「こそ」の三語を考察の対象とした。和歌（引歌部分を含む）中の用例は対象外とした。

## 二 二重の係りの用例

係助詞の付いた文節が一文中に二つ（以上）あって、それらが同一の用言に係っているとき、その係結関係を「二重の係り」と呼ぶ。ただし、三つあるいはそれより多くの「係助詞の付いた文節」が同一の用言に係っている用例はみられない。また、以下、同一用言に係る二つの係りのうち、用言から遠い方を「第一係り」、用言に近い方を「第二係り」と呼ぶ。

調査資料中から「ぞ」「なむ」「こそ」が「二重の係り」を起していると思われる例は15例採集される。この用例の

## 二重の係り

小 田 勝

Double Occurrences of Kakari  
particles in a Single Phrase.

Masaru Oda

## 要 旨

係結については多くの研究がなされているが、違例、破格とされる例の全体像は明らかではない。しかし、係結の本質に迫るためにも、係結の違例の詳細な調査、整理が必要である。本稿は、係結の違例のうち、一つの結びに二つ(以上)の係助詞に係る現象(「二重の係り」と呼ぶ)についてとりあげ、(1)用例は極めて少ないがそれでも中古和文中に異文のない例(またはそれに準ずるもの)も存在すること、(2)「二重の係り」となるのは「—ぞ—ぞ—連体形」「—なむ—なむ—連体形」「—こそ—こそ—已然形」のように同じ係助詞どうしに限られること、(3)「二重の係り」の句型は三つのタイプに限られること、などを指摘する。

## ○ 本稿の目的

係結は国語の文を考える上で重要な現象であり、すでに

多くの研究がなされている。古典文中の係結の実態調査も種々の視点から行なわれているが、係結には違例、破格、誤用などとされる例があり、それらの全体像はなお明らかではないように思われる<sup>①</sup>。しかし、従来違例、誤用とされてきた<sup>②</sup>、

1 「源氏ハ」わざとの御学問はさるものにて、琴笛の音にも雲居をひびかし、「美点ヲ」すべていひつづけば事事しう、うたてぞなりぬべき人の御さまなりける。  
(源氏・桐壺・第①冊二二頁3行)<sup>③</sup>

のような例も、調べてみると、実は右のような係結の呼応は必ず行なわれるのであり(つまり「うたてぞなりぬべき人の御さまなりける。」といった例は存在しない)、必ずしも誤用とはいえないことが知られる(前稿)<sup>④</sup>。このように従来違例、誤用とされてきたものも詳細に調査される必要があり、その結果は、逆に係結の本質に迫る上で重要なものとなるだろう。本稿は、係結の違例のうち、一つの結びに二つ(以上)の係助詞に係る現象についてとりあげ、それが起こるのは同じ係助詞どうしに限られること、その句型には三つのタイプがあること、などを指摘する。

## 一 係結の違例

「係結の違例」にどのようなものがあるかは、「係結」をどう定義するかによって異なってくる。しかし係結の定義は、前節で述べたように「係結の違例」とされる例の分析によって変更される。これでは堂々めぐりとなってしまう